

## Special Essay

### 暗闇の夢

感染医学講座

桑野 剛一

Seeing is believing. これは、中学生の頃に英語の授業で覚えたフレーズで、「見ることは信じること」という意味でしょうか。ところが、先だってこれは「本当か？」と疑った。

さる六月に開催されたヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール（テキサス）で全盲の辻井伸行さんが優勝した。その演奏は素人の耳にも素晴らしいものであった。帰国後、辻井さんは、「もっと人生経験を積んで、深みのある音楽をつくっていきたい。恋をしたり、本を読みたい」と今後の抱負を語った。その言葉の中の「恋をしたり」にひっかかり少しばかり考えた。辻井さんは、先天性の全盲である。ひとつの疑問として、女性というヒトがこの世に存在することは理解しているだろうが、見たことは一度も無いのである。どうして恋をしたいという感情、こころもちがおこるのであろうか。興味がふつふつと湧き上がった。視覚障害者の側に立って、思い巡らすといろいろな疑問が湧いてくる。色をどのように理解するのであろうか？夢を見るのだろうか？しばしば耳にするコメントに、全盲の障害があるから素晴らしい演奏ができると。おそらく視覚障害のため、聴覚、音感等が鋭くなるという理由だろう。科学的には、先天性全盲者はある種の感覚において、健常人（晴眼者）に勝るとも劣らないという結果も示されている。しかし、本当のところは誰にも分からない。もちろん、本人の才能、努力によるところが大であることは論を待たないだろう。

このような視覚障害のハンディを背負いながらも、辻井さん以外にも多くの方々が、学校の先生、弁護士、医師、研究者等として実に様々な分野で活躍されておられる。しかしながら、私たちの医生物系の研究分野で視覚障害を有する研究者が活躍されているとは寡聞にして聞かない。たとえ目が見えなくとも研究活動は可能ではないだろうか。むしろ、「見（え）ること」による思い込みが強すぎると、思考が固定化し柔軟性が失われる可能性はないだろうか。長年に渡って、多くの実験研究者が積み上げてきた膨大な知見を闇の中で統合、再構築して、新たなパラダイム（考え方、物の見方）を予言するような「理論生物学」が盛んになり、「理論物理学」の分野で有名だった故湯川秀樹博士の「湯川理論」が後に実験物理学者により実証されたように、視覚に障害がある研究者によって斬新な仮説理論が提案され、私たちのような実験研究者が実際に証明する。そんな夢を八月の寝苦しい暗闇の中に見た。

